

教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年の歩み(昭和56年から57年にかけて)

村 上 英 治

1) 昨年国際障害者年だった。新しい障害者福祉の幕はここに開かれたといつてよい。

養護学校義務制実施と相呼応して、3年間にわたりすすめられてきた愛知県教育センターのプロジェクトも、最終年度のまとめとして57年3月、「心身障害児の就学指導に関する研究(第3次報告)」を刊行するに到った。新たに14の事例研究が報告されて、就学指導委員会の今後のあり方にひとつの指針を提起するものとなろう。顧問としての職責を一応終えたことになる。

名古屋市もまた、障害者年にうち出した施策を実現すべき試みのひとつとして、56年9月に「名古屋市障害児早期療育指導委員会」を発足させた。その委員長としての役割をになうことになって、以降毎月一回の例会での審議を重ねながら、早期診断の対応策を練り、総合通園センターの設立をめざすと共に、センター設立後の障害児に対する継続的の追跡のありかたを検討している段階である。

2) 早期障害児療育に関しては、臨床棟における重度発達遅滞児を対象とする母子通所形態の集団療育を、相変わらずつづけてきているが、昨年はその11年目に入ったのを契機に、昭和46年これを始めて以来、それに参加し、一応次の段階へと送りこまれた障害児全員と療育担当者全員約100名によびかけ、その大半の参加を得ての同窓会的集会を、56年10月もち得たことは忘れがたい。依然それぞれの障害をにないながら、たくましく成長している子どもたちに久方ぶりに出会って、この療育自体の意義を改めて省りみる機会ともなった。

昨年度の療育の成果は、ひとつには健常のきょうだいたちの療育参加の意義を検討したものとして、今ひとつには、それまで3年間つづけて参加した2人の特別に障害重い子どもたちの母親自身の成長と変革をあとづけるものとして、57年5月東海心理学会第31回大会で口頭発表を行なったが、本紀要にもその成果が掲載されている。

なお昨年までの8篇にわたるこの療育についての紀要報告を再編成して、57年10月、福村出版から上梓する運びに到った。「障害重い子どもたち——集団療育の場——」との標題のもと、後藤秀爾との共編という形態を

とる。

3) 56年10月、日本心理学会第45回大会における公開シンポジウム「心理学を問い直す——現代の状況と人間研究」の席上、私なりの視点に立ってのフロアから提言は、57年7月、川島書店から刊行された、「現代の心理学を考える」の中にもとりいれられた。「人間行動」の研究に終始することなく「人間性」そのものに眼を向けることへの要請をしたものである。

その方向性を推進するものとして、これまで3年来積み重ねてきたヒューマンステイック心理学研究会を基盤に、日本人間性心理学会が57年7月、京都女子大学での今年度の研究会において正式に発足する運びに到った。その会においてヒューマンステイック心理学の意義についての研究発表の司会を引きうけ、また設立総会の議長の役割をもになったのであるが、広い意味での人間学的、人間主義的、現象学的、実存的立場からの研究をすすめることによって、心理学におけるある種の人間復活を意図する意義をもつ、この学会設立をすすめた世話人の一員として、日本心理学会における上記の提言の趣旨に沿って今後の努力をつづけていきたいと考える。

4) この種の風潮と同じく位置づけられるものではあるが、57年3月、「日本心理臨床学会」をも新しく設立させることになった。「日本臨床心理学会」が昭和45年の学会紛争のあと、改革委員会の手にも委ねられて以来、それまで学会運営の中核にあった私どもの10数年にわたる念願がようやく叶ったともいえる。54年10月名古屋で、55年10月八王寺で催された「心理臨床家の集い」は、56年12月琵琶湖における第3回の集会としてうけつがれたのであるが、600名に及ぶ参集者の中からの、強い要望にこたえたものともいうことができる。57年10月には、その第1回大会が九州大学において開催されることになっているが、「日本臨床心理学会」の設立以来の線に沿っての第6回大会が46年九州でもたれて、それがいわば終焉の大会となったこと、また53年、日本心理学会第42回大会で、具体的に新しい方向性をめざしての機運がきざしたのであるが、それが九州大学でもたれたこととあわせて、その間積極的に参与してきたもののひとりとして

今無量の感に耐えない。心理臨床家の資格認定、卒後教育および養成課程、症例を中心とする相互研修などといった多くの課題が山積する。この切磋琢磨の中から明日の心理臨床家のあるべき姿を問いつづけていくことが要請されているとあってよい。

5) 心理臨床家の原点を、病院臨床の中に位置づけていこうとするのは、精神医学教室の中で、臨床心理学を学びはじめた私にとってのゆるぎがたい信念のひとつでもある。多くの問題をはらみながら、多様な実践活動をつづけている、私どもの周囲の病院臨床に従事する心理臨床家の個々の実践記録に即して、いくたびかの討論をつづけてきた。誠信書房から、57年10月刊行される予定になっている「心理臨床家——病院臨床の実践——」(池田博和、渡辺雄三との共編)は、これまでの成果を世に問うための一里塚ともいうことができる。

6) 学生相談活動の面からは、この年もまた恒例の全国規模における第15回の研究会議が57年1月、筑波大学において開催された。冒頭シンポジウム「新入試制度に伴う学生の意識と諸問題」での司会をつとめ、共通一次試験制度の検討、特に推薦入学制度をめぐる提言をうけた上、この制度前後の学生の適応状況の変容が真摯に討議された。いつにかわらぬ全国同学の士のカウンセリング・マインドに、深い敬意を表したい。

名古屋大学における学生エンカウンター・グループは、56年度も秋気いよいよ深まろうとする10月、中津川共同研修センターにおいて昨年にひきつづき第5回目を実施した。今までのファシリテーター・グループに、新たに現相談室長としての加藤雄一氏が加わって、4人で取り組むことになったこと、さらにたまたま昨年度教育心理学科研究生として西独から留学していたDoris 女史がこのグループに参加し、国際的色彩を帯びたグループとなったことなどが印象的であった。言葉のハンディキャップをこえ、人間は人間同志、国籍こえてかかわりあうことの可能性を実感することが出来たのも、心うたれて忘れがたい思いである。

7) 57年4月、はからずも名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校の校長を併任することになった。その任にふさわしくないことを十分承知しながら、やむを得ず、その役割をになって4ヶ月経過した。ようやく馴れてきた段階にすぎないが、若い生徒諸君との出会いは新鮮であり、現場での教育活動はまさに活気にみちあふれ、新しい体験を得た喜びは何ものにもかえがたい。ひとりひとりの成長を心から期待しながら、人間管理の校長でなく、人間理解の校長でありたいとみずから決意している昨今である。

(昭和57年8月19日)

研究報告概要

丸井文男

1. 約2年前にはじめたロンドン大学のラター教授とノースカロライナ大学のショプラー教授編著の訳出は、分担者の変更や、多忙もありおくれ、漸く昭和57年4月刊行をみた。1976年にスイスで行なわれた当時の自閉症研究の第一線の研究者のシンポジウムの討論をもとにした論文の総合的集大成されたもので、この本を監訳出来たことは大きな意義をもっていると思っている。

2. そのためか、既に4年越しになっているわれわれ自閉症研究グループの10年以上に亘る研究の総まとめの著書は、まだ、最終的に原稿が集まっていない。編著書

としていろいろ責任を感じているが、グループ研究の性格をいかすとなるとなかなかむずかしいことになる。しかし、なるべく早く刊行をしたいと念じている。

3. われわれの自閉症研究も10数年になり、長期追跡研究のまとめをあらたに実施しつつあるが、この研究計画を立てつつある段階で2年計画にならざるを得ない。

4. 個人的には、長年あためている成因論の再検討も考察しているが、雑用が多く遅々としてすすまない。なんとか早くまとめたい心境である。